

## 第一章 夕霧の物語 雲居雁との\*筒井筒の恋実る

\*「筒井筒(つつみづつ)」は、「筒井」が<筒のように丸く掘った井戸>で、その<筒井を囲む枠>と大辞泉にある。井戸端か。そして此处での語用は、伊勢物語 23 段の話の中で或る男が幼馴染の恋人に「つついつの(筒井つの、小さい時に遊びで丸井戸の)いづつにかけし(井筒に掛けし、囲いに線を付けて計った)まろがたけ(麻呂が丈、僕の背丈は)すぎにけらしな(過ぎに来らしな、十分大きくなったかと思うな)いもみざるまに(妹見ざるまに、君と会わなかった内に)」と言い寄ったことに由来して、幼馴染みの源氏君と藤原姫が結ばれる、ということらしい。

### [第一段 夕霧と雲居雁の相思相愛の恋]

御いそぎのほどにも(明石姫の御入内を控えた三月の下旬にも)、宰相中将は眺めがちにて(兄中将は沈みがちで)、ほれほれしき心地するを(藤原姫を思えば心此处に在らずの心境だったが)、かつはあやしく(それでも素直になれず)、「わが心ながら執念きぞかし(我ながら執念深いことだ)。あながちにかう思ふことならば(こんなに強く姫を恋しく思うなら)、\*関守の(関守である藤原殿が)、\*うちも寝ぬべきけしきに思ひ弱りたまふなるを聞きながら(古歌に在るようにちょうど上手く寝てしまいそうな具合に弱気に成っていらっしゃるのを聞きながら)、同じくは(どうせなら)、人悪からぬさまに見果てむ(恥を雪ぐために藤原殿から申し入れてもらう形にしたい)と念ずるも苦し(と我慢するのも辛い)」う思ひ乱れたまふ(と思ひ悩みなさいます)。 \*「関守」については、注に<「人知れぬわが通ひ路の関守は宵々ごとのうちも寝ななむ」(古今集恋三、六三二、在原業平・伊勢物語五段、六)を踏まえた表現。>とある。早速に「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページを参照すると、「うちも寝ななむ」を<うたた寝でもして欲しい>のように解しておられる。確かに、この歌を引いた言い回しの「うちも寝ぬ」が当文の解釈に於いても焦点なので興味深い所だが、是に付いて、というか是の点を含めて引歌の歌意に付いては次項で改めて考えることにして、此处ではこの歌の詞書がほぼ伊勢物語五段に等しいほどの長文らしいので、当時の人の常識として「関守」という言い方が何を想起させるかを知る為にも、まずは伊勢物語五段を見る。伊勢物語は、真偽はともかく業平艶談として当時の宮廷人のネタ本になっていたらしく、業平 30 余歳の仕業として<五条の女のところに忍び通いをしていたが、門からは入れず、子供が壊した土壁の透き間から出入りしていたところ、度重なることに家の主人に露見して其処に見張りを立てられてしまい、出掛けて行ったものの会えずに帰って来た。そこで詠んだ>のがこの引歌だ、という内容の話で、此处までは古今集の詞書にもほぼ同様のことが記されている。しかし伊勢物語には其の後の顛末が記されていて、それが結構な艶聞だ。五段には、「そこで詠んだ(さてよめる)」とした後に歌の掲示があるが、是は女に窮状を訴えた贈歌文だったらしく、それを受け取った相手の女は「そう詠んである手紙を読んで(と詠めりければ)」「業平に会えなくて恋患いに憔悴した(いといたう心やみけり)」とあり、何と「見かねた家主は業平の夜這いを許した(あるじゆるしてけり)」というのだ。この五条の家主は仁明天皇の女御で、その時には御世代わりで五条院に下がって「五条の後」と呼ばれていた 50 歳くらいの藤原順子(ふじわらののぶこ)とのこと。さらに、その相手の女は、この話の時点では 17,8 歳だったらしいが、後に 25 歳で 16 歳の清和天皇の女御として入内し、二年後に次帝となる御子を儲け、その八年後にその子が僅か 9 歳で陽成天皇として即位し、その五年後に皇太后位を得たが、その二年後に同母兄の藤原基経(ふじわらのもとつね)との政争に敗れ、次の光孝天皇への譲位があると、後宮から二条院に移り住み「二条の後」と呼ばれた藤原高子(ふじわらのたかいこ)のこと、だそう。そして五段末には、後世に写本した人の覚書であるらしい「二条の後にしのびてまゐりけるを、世の聞えありければ、せうと(兄)たちの守らせたまひけるとぞ」という注釈文まで記されているとのこと。そうした事実関係の経緯は年表や Wikipedia の各人の項目で調べることが出来るが、この伊勢物語五段および六段に記された

業平と高子と基経との関係への当時の人たちの認識については、「神田雑学大学」サイトの「在原業平のあぶない恋愛」(講師 川口順啓)というページに興味深く解説されている。どうやら高子が正統な王家筋を代表し、基経が藤原氏を代表して藤原支配を完成させようという時勢で、兄妹対決する局面を迎えてしまったようで、是は相当に面白い愛憎劇にも仕立てられそうだが、近親者で権力闘争していれば何処かでこういう事態にはなるのだろう。高子はその後、光孝帝の次の宇多帝に高僧との不倫嫌疑で55歳にして皇太后位を廃されるが、死後三十年余経た朱雀帝に復位されるという波乱万丈の68年の生涯だったらしい。で、古今集や伊勢物語が成立したであろう905年あたりの醍醐帝期は高子存命中ながら后位の剥奪期で、彼女のあぶない話もし易かったのかも知れない。いやだから、当時の読者は「関守の打ちも寝ぬべき」という言い回しで、源氏君を業平、藤原姫を高子、藤原殿を基経、の構図に準えて楽しく読んだのだろう、と推察できるわけだ。\*「うちも寝ぬ」は<「人知れぬわが通ひ路の関守は宵々ごとのうちも寝ななむ」(古今集恋三、六三二、在原業平・伊勢物語五段、六)を踏まえた表現。>に違いないのだろう。が、引歌を見る前に、本文の「うちも寝ぬべきけしき」は<内大臣が邪魔立てを止めそうな気配でいる>ことを言っている、ということ踏まえれば、「寝ぬべきけしき」は<寝てしまいそうな様子>だから、「うちも」は<思わずつい、少し>と言うよりは<敢えて、ちょうど今>という方がハマる気がする。尤も、「うちも」はそうした意味の副詞だとの説明などは辞書にも無いが、「内に(中でも特に、とりわけて)」や「打ち付けに(出会い頭に、咄嗟に、不意に)」に条件提示の係助詞「も」が付いたものの音便、くらいを考えて見当を付ける。さて、そこで引歌だが、上句の「人知れぬわが通ひ路の関守は」は<忍んで通う女の家の門番は>で良いのだろう。ただ、活用語の未然形に付いて打消しの意を表す助動詞「ず」の語用について、「人知れず(人に知らさず=忍んで)」が下二段活用の「知る」で、「人知らず(人に知られていない=露見していない)」が四段活用の「知る」だ、という違いは留意したい。問題は下句だ。「宵」は<夜の早い時間>で<夜這って行く時間>。「よひよひごとに」は<毎夜通って行く其の時間に>だから、「うちも寝ななむ」は矢張り<ちょうど寝ていて呉れないかな>が良さそうだ。門番がいて会いに行けないのだから、その門番が<うっかり偶々>であろうと<決まって其の時間に>であろうと、寝ていてさえ呉れれば良さそうなものだが、会えないことが切実なら<決まって其の時間に>寝ていて欲しいのだろう。その方が窮状を訴えるには相応しい歌意だ。斯くて、本文の意図とも目出度く符合した次第。即ち、「うちも」は<ちょうど上手い具合に>だ。

女君も(姫君も女心に)、大臣のかすめたまひしことの筋を(父大臣がほのめかしなさった源氏君と中務宮姫との縁談が)、「もし、さもあらば(もし成立するならば)、何の名残かは(此処で文を交わしても、何の慰めになるものか)」と嘆かしうて(と嘆かわしくて)、あやしく背き背きに(却って返事も出さないでいて)、さすがなる御もろ恋なり(そのように素直になれないでいるじれったい両思い同士なのでした)。

大臣も(藤原殿もかつては)、さこそ心強がりたまひしかど(相当なまでに強情をお張りになったが)、\*たけからぬに思しわづらひて(当て外れの膠着状態に思い悩みなさって)、「かの宮にも(中務宮家にあっても)、さやうに思ひ立ち果てたまひなば(源氏家との婚儀を決心しきってしまいなさったならば)、またとかく\*改め思ひかかづらはむほど(後から当家が横槍を入れて、また何かと改めて別の相手を探し掛かりなさると言うのは)、人のためも苦しう(先方にも心苦しく)、わが御方さまにも人笑はれに(当家の姫の御評判も嘲笑されて)、おのづから軽々しきことや\*まじらむ(どうしても宮廷内に軽々しい印象を与えてしまうだろう)。\*忍ぶとすれど(しかし、我慢して言わず仕舞いするにも)、うちうちのことあやまりも(いどこ同士で通じていて他家から見れば姫が疵物なのは)、世に漏りにたるべし(世間に知れていることだし)。とかく紛らはして(何か良い口実に託けて)、なほ負けぬべきなめり(やはり此方から折れるべきなのだろう)」と、思し

なりぬ(お思いになりました)。 \*「たけからず」は「たけくあらず」だろうが、この「たけし」は「長けし(長けている、増えている、優れている、上首尾だ)」でもあり、「猛し(強い、激しい、盛んになる、盛り上がる)」でもある。で、この「たけからず」の語感は<盛り上がり>だ。というのは、実は藤原殿の反対は最初から<我慢比べ>だということが諸バレだ、ということが前提になっている。姫が源氏君と通じたから入内機会を逸した、と言うが、相手が源氏君以外の小者なら、そんなことは無視、というか抹殺して、大藤原は平然と姫の入内準備を進めれば良いし、進めただろう。相手が源氏君だけに無視も出来ず、しかし源氏殿に負け続けるのが我慢できない藤原殿は、姫の父として二人の結婚に反対して見せて、源氏君、というよりも源氏殿だろう、が頭を下げて婚儀を頼み込んでくる形に、どうしてもしたかった。だから藤原殿は、入内準備もせず、他の縁談を進めることもせず、源氏君に入内を邪魔されたと言い立てて、その見返りに自分は二人の仲を認めない、という分かりやすい拗ね方をしていたのだ。当然に、それは源氏君にも、源氏殿にも直ぐに汲み取れる意図だった。だから普通なら、源氏側が折れて藤原殿に頭を下げれば、といっても悪事を犯したわけではないので体裁を繕うという意味で、立后を逸した藤原家とは言え大家に変わりはないので、源氏家は以前と変わらず敬意を払い続ける、ということに改めて周知させるという政治的配慮を互いが認識し合う、という実利を以て、一件落着するはずだった。が、藤原殿は幾分冷静さを欠いて、源氏君の当時の身分の低さを言い立てて二人の仲を裂く、という誤解を招きやすい手段を取ってしまった。そして、姫の乳母に源氏君を侮るような発言までも許してしまった。それが源氏君の闘争心に火を点けた。さらに源氏殿が申し入れの意向をほのめかした時にも、頼みごとではなく相談ごとのように持ち掛けたものだから、立場が分かって居ないと頭から撥ね付けてしまった。源氏殿としても頭ごなしの拒絶に屈する体裁は取れない。「我慢比べ」の構図は分かっているので、源氏君は素知らぬ素振りで藤原殿の挑発に真っ向から応じ、源氏殿は様子を見る、という展開になってしまった。斯くして、藤原殿が最初に目論んだ、源氏側がご機嫌伺いに参じて婚儀の機運が盛り上がる、という構想は頓挫した。そういう意味で「たけからず」の<盛り上がり>の内情は<不首尾で→当てが外れて>を意味し、その「ず」の連体形「ぬ」が示す対象体言は<膠着状態>ということになる。 \*「改め思ひかづらはむほど」は注に<夕霧以外に別の婿を探すことをさす。>とある。ということは、内大臣家が源氏家に婚意を示せば、当然に中務官家は身を引かざるを得ない、という身分秩序が当時の宮廷人にとっては常識だったような書き方になっているわけで、そういう常識の無い私などは此処の文意の解釈にだいぶ悩んだ。 \*「まじる」は、単に<混在する>という意味だと文意が取れない。この「まじる」は<交際する>で、とくに御所での宮仕えに於いて<話題に上がる→印象付く>と解す。 \*「しのぶ」を<隠す>と取るのは論理的に成立しない。何を隠すのか。姫と源氏君が通じていたこと自体は「世に漏りにたるべし」とあり、この「べし」を藤原殿自身が蓋然性を認識して<～に違いない>と言おうが、単純推量の<～だろう>と言おうが、客観状勢として「世に漏りにたる(既に世間に漏洩してしまっている)」ことに変わりはない。では、姫の「恋心」を<隠す>のか。当人同士は両思いを知っているし、「恋心」は元々第三者に<打ち明けるもの>ではない。仮に、その「恋心」を友人に話すことがあったとしても、それは<隠し事を打ち明ける>のではなく<悩み事を相談する>のだ。まして、中務官や宮姫は藤原殿や姫の、少なくとも是を相談すべき友人でもないだろう。つまり、別に姫の「恋心」を知らせるべき相手ではない。しかし、知らせるべきことがあるから「しのぶ」に違いない。知らせるべきことは「婚意」であり、「しのぶ」は其れを<表明しない=口に出さない=申し込まない>のだから、直接には源氏家に対して<我慢する>だ。

\*上はつれなくて(うわべは素っ気無く)、恨み解けぬ御仲なれば(わだかまりの解けない藤原殿と源氏君の御仲なので)、「\*ゆくりなく言ひ寄らむもいかが(出し抜けに親しく言い寄ろうというのも如何か)」と(と藤原殿は)、思し憚りて(それは無理だとお思いになり、かと言って)、「ことごとくもてなさむも(事改まって結婚話を持ち出すのも)、\*人の思はむところをかなり(人目に大袈裟に見えて馬鹿げている)。いかなるついでしてかはほのめかすべき(何かの折を見計らっ

て仄めかすべきなのだろう)」など思すに(などとお考えになっていたところ)、\*三月二十日(やよひはつか)、大殿の大宮の(御母堂の大宮の)御忌日にて(おんきにちにて、三回忌の御命日なので)、\*極楽寺に詣でたまへり(菩提寺の極楽寺に参詣なさいました)。\*「うへは」とあると、急に紫の上が登場したのかと思ったが、此处では<表面上は>ということのようで、実に紛らわしい。\*「ゆくりなし」は<「ゆくり」なるさま>のようで<不意に>と説明される。が、「ゆくり」という語は無いが不明で、語感がつかめない。で、「行き当たりばったり」あたりを勝手に考える。\*「人の思はむところをこなり」の文意は「人の思はむところ、ことごとしうて、をこなり」だろう。「ことごとし」を省いたまま<人目に馬鹿げている>と言い換えると、「もてなさむ」ことが<馬鹿げている>ように見えて文意を損なう気がする。\*「三月二十日」が大宮の命日だというのは、此处で明示されたわけだ。注には<大宮の一周忌。その薨去は物語に語られていないが、「行幸」巻に「去年の冬つ方より悩みたまふ」(第一章五段)とあり、「藤袴」巻(第一章二段)に玉鬘が祖母の喪に服している様が語られている。>とある。ただ、藤袴巻の話は二年前なので大宮は今年で三周忌だ。にしても、藤袴巻第一章第二段の対の姫のいきなりの「薄き鈍色の御衣(薄青ねず色の喪服で)、なつかしきほどにやつれて(故大宮を偲ぶように力落とした風情で)」という喪服姿には面食らったが、こんな重要な記事が此处まで語られないなどというのは、やはり奇怪しい。\*「極楽寺」は、今は宝塔寺という伏見稻荷の南にある寺、の前身であるらしい。だから「藤裏葉/極楽寺」で検索しないとヒットしない。

## [第二段 三月二十日、極楽寺に詣でる]

君達皆ひき連れ(藤原殿は御子息たちを皆引き連れて)、勢ひあらまほしく(一族の威勢は現下の最上のもので)、上達部などもあまた参り集ひたまへるに(政府高官たちも多数参列なさる所に)、宰相中将(源氏の宰相中将は)、をさをさけはひ劣らず(少しも見劣りすることなく)、よそほしくて(威風堂々と)、容貌など(顔立ちなど)、ただ今のいみじき盛りにねびゆきて(正に今を盛りと生気溢れて)、取り集めめでたき人の御ありさまなり(何処を取っても文句の無い人という御姿でした)。

この大臣をば(この伯父大臣のことを)、つらしと思ひきこえたまひしより(ひどい人だと思ひ申しなさってからは)、見えたてまつるも(お会い申し上げるにも)、心づかひせられて(緊張せずにはいられずに)、いといたう用意し(もうしっかりと身構えて)、もてしづめてものしたまふを(平静を装いなさる源氏君を)、大臣も(藤原殿も)、常よりは目とどめたまふ(この日は改めて意識して御覧になります)。御誦経など(みずきゃうなど、大宮を悼む読経上げなどの法要は)、六条院よりもせさせたまへり(源氏殿からも御寺側に依頼なさっていらっしやいました)。宰相君は(さいしゃうのきみは)、まして(可愛がって呉れた故祖母を思えば、誰よりも率先して)、よろづをとりもちて(式次第の運びを受け持って)、あはれにいとなみ仕うまつりたまふ(しめやかに役目を果たしなさいます)。

夕かけて(夕方にかけて)、皆帰りたまふほど(参列者が次々にお帰りになると)、花は皆散り乱れ(桜の花が散って)、霞たどたどしきに(霞みたなびく物寂しい庭先を)、大臣(おとど)、昔を思し出でて(王家の春を体現していた大宮の在りし姿を偲んで)、なまめかしう\*うそぶき眺めたまふ(雅やかに春の歌を朗詠して眺めなさいます)。\*「うそぶく」は<うそ(口笛)を吹く>という言い方で、実際に口笛を吹くことや、息や声を長く出すことや、吟詠する、鼻歌を歌う、そして、空とぼける、ことなどを表

現するようだ。此処では「なまめかしう」とあるから、藤原殿が大宮を偲んだ歌、それが何かは書かれていないので分からないが恐らくは春の歌、を朗詠したのだろう。

宰相も、あはれなる夕べのけしきに(風情ある夕べの景色に)、いとどうちしめりて(ますます感傷的になって)、「雨気あり(あまけあり、雨が来そうです)」と、人びとの騒ぐに(人々が帰りを急ぐのに)、なほ眺め入りてみたまへり(ずっと庭を眺めて座っていらっしやいます)。\*心ときめきに見たまふことやありけむ(内大臣は今こそと見極め時にお思い為さったのか)、袖を引き寄せて(宰相に近付いて袖を引き寄せては)、 \*「心ときめき」は<胸騒ぎ、逸り心>のようだが、「に見る(〜と判断する)」の格助詞「に」は<△を▲と判断する>の<と>であり<▲>が「心ときめき」ということになる。では<△>は何か。それは宰相が「なほ眺め入りてみたまへり」という状態であり、それを場面認識として判断対象とする言い方は<今この時>だ。ということは、「心ときめき」は<今この時>を正に<その時>と判断する時の<緊張感=胸騒ぎ>だ。ところで、「その時」とは上文により<然り気無く婚意を持ち掛ける好機>であり、この判断内容は当文に於いては「見る(見たまふ)」に含意されていて、目的語と述語で等価消滅して省略され、この「心ときめきに」の「に」は<今の緊張感>が其の<見極め時>なればこそだ、という文意を持つ。つまり、この文はそういう場面描写なわけだ。だから、此処の文は「今ぞと見たまふや」で良さそうに思えるが、それでは軽過ぎる言い方なのだろうか。だとしても、他に言い方はあるだろうに、何で作者がこんな分かり難い言い回しをするのかは、分からない。何かこういう場面に因んだ引歌でもあるのも知れない。

「などか(なぜだか)、いとこよなくは\*勘じたまへる(ずいぶんひどく不機嫌でいらっしやる)。今日の御法の縁をも(けふのみのりのえにをも、この御法要に会した身内の縁故を)尋ね思さば(たどってお考えになれば)、罪許したまひてよや(私の罪は許して貰えませんか)。残り少なくなりゆく末の世に(余命少ない晩年に)、思ひ捨てたまへるも(御見限りなさるとは)、恨みきこゆべくなむ(恨みに存じます)」 \*「勘ず」は「かんず」と読みがある。以前は「かうず」とあったかと思うが、「かうず」が「かんず」の音便らしい。漢字から来た語なのだろう。だから、「勘ず」は<勘定に合わないと追求する>のだろうし、規定値から外れていることが<勘に障る>のだろうし、それで怒る事もあれば責める事も咎める事もあるのだろう。ただ、此処の言い方は「上はつれなくて」いることに対してだから、中将は<不機嫌でいる、不服そう>くらいなのだろう。

とのたまへば(と仰れば)、うちかしこまりて(宰相君は威儀を正して)、

「過ぎにし御おもむけも(お祖母さまの御意向にも)、頼みきこえさすべきさまに(伯父上を頼り申し上げよとのように)、うけたまはりおくことはべりしかど(お聞かせ頂いたと存じておりましたが)、許しなき御けしきに(お許しの無い御様子に)、憚りつつなむ(遠慮しておりました)」

と聞こえたまふ(とお応えなさいます)。

心あわたたしき雨風に(荒れそうに見える雨風の様子に)、皆ちりぢりに競ひ帰りたまひぬ(皆散り散りに急いでお帰りになりました)。君(宰相君は)、「いかに思ひて(伯父上は何を思って)、例ならずけしきばみたまひつらむ(いつになくお許しの意向を表立って仰ったのだろう)」など、世とともに心かけたる御あたりなれば(人生に関わることとして気に掛けている姫の御家事情

なので、はかなきことなれど(内大臣のほんの一言だったが)、耳とまりて(耳に付いて)、とやかうやと思ひ明かしたまふ(何やかやと考えて夜を明かしなさいます)。

### [第三段 内大臣、夕霧を自邸に招待]

ここらの年ごろの思ひの\*しるしにや(長い年月思い続けてきた甲斐があつてか)、かの大臣も(さすがの藤原殿も)、名残なく思し弱りて(すっかり気弱になられて)、はかなきついで(風情めかして)、わざとはなく(改まった席でもない)、さすがにつきづきしからむを思すに(それなりに相応しかろう機会をお考えになって)、\*四月の朔日ごろ(うづきのついたちごろ)、\*御前の藤の花(庭先の藤の花が)、いとおもしろう咲き乱れて(とても面白く咲き乱れて)、世の常の色ならず(普通の咲き方とは違って)、ただに見過ぐさむこと惜しき盛りなるに(ただ見て終わるには惜しい華やかさなので)、遊びなどしたまひて(管弦を演奏しての宴席を開いて)、暮れ行くほどの(暮れかかった)、いとど色まされるに(ますます見応えのある時分に)、頭中将して(頭中将を遣わして)、\*御消息あり(宰相君にお招きのお声掛けがありました)。\*「しるし」は<表象=ある概念を示したと認識される形態>で、その「概念」が物や思ひの質量の程度だったり、目標値であつたり、成功記念値だつたりするわけで、此処では<成果、効果>であり<努力の甲斐>なのだろう。注には<『集成』は「夕霧の側に立った叙述」。『完訳』は「「--にや」は、語り手の推測」。語り手の推測。>とある。確かに、作者の配役構成が窺える書き方のようだ。\*「四月の朔日ごろ」は注に<四月上旬の意。後文に「七日の夕月夜」とある。>とある。\*「おまへ」は内大臣家の庭先だ。が、内大臣邸は何処にあつたのか。五条だつたか、明示は無いのか、六条院から近いのか遠いのか、真近ではなくても然程は遠くないのだろうか。「頭中将して御消息あり」の気安い、というか手軽、というか日常感みたいなものが妙に気になる。\*「おんせうそこ」には藤原殿からの手紙も含まれていたようだが、頭中将は文遣いではないのだから、直接宰相君に誘いの言葉を掛けたに違いない。マ、早い話が<迎えに来た>ということなのだろう。「消息」は<便り>であり<訪問>であり<来意を告げること>でもあるようなので、この「御消息」は<お声掛け>にして置く。

「一日の(ひとひの、先日の)花の蔭の対面の(極楽寺の庭先での対面では)、飽かずおぼえはべりしを(話し足りない気が致しますので)、御暇あらば(お暇でしたら)、立ち寄りたまひなむや(お立ち寄り頂けませんか)」

とあり(と御伝言があり、)。御文には、

「わが宿の 藤の色濃き たそかれに 尋ねやは来ぬ 春の名残を」(和歌 33-01)

「春の名残の藤の花、此処で色濃く咲いてます」(意識 33-01)

\*注に<内大臣から夕霧への贈歌。『白氏文集』の「惆悵す(ちゅうちょうす)春帰つて留むることを得ざることを紫藤(しとう)の花の下に漸く黄昏たり」(和漢朗詠集、春、三月尽)を踏まえる。夕霧招待の主旨。>とある。解説ページをWebで探すと「漢詩の世界」サイトの「漢詩13」ページに「三月三十日題慈恩寺 白居易」という此の歌であろう漢詩とその訳文があつたので、全面的に頼る。即ち、漢詩は「慈恩春色今朝尽 尽日徘徊倚寺門 惆悵春帰留不得 紫藤花下漸黄昏」とあり、訳は「慈恩寺の春も今朝でおしまい。一日中、境内を歩き回って、寺の門にもたれる。行く春をひきとめることができないのが悲しい。紫の藤の花の下、しだいに日が暮れていく。」とある。注の指摘意図は、「寺」がらみの「藤」に<春を惜しむ>つながり、ということだろうか。だが寧ろ、この歌の詠み方の妙味は、「誰

そ彼れに尋ぬ」に<娘に会いに来れば良いのに>を仄めかし、「名残」に<大宮を偲ぶ>という言い方で宰相君を誘う、という語り口にありそうだ。

げに(確かに)、いとおもしろき枝につけたまへり(とても見事な花を付けた藤の枝に結び付けてありました)。\*待ちつけたまへるも(宰相君は内大臣が極楽寺でほのめかし為さって以来、いつお邸に誘いが来るのかと、待ち受けていらしゃったので)、\*心ときめきせられて(胸騒ぎさせられて)、かしこまりきこえたまふ(恐縮申しなさいます)。\*「待ちつけたまへる」は注に<夕霧は極楽寺で内大臣に会って以後、心密かに期待するところがあった。>とある。従って、補語する。\*「心ときめきせらる」は<心ときめき(名詞)+せ(動詞「す」の未然形)+らる(受身の助動詞)>で<胸騒ぎさせられる>だと思うが、妙に分かり難い。

「なかなか折りやまどはむ藤の花、たそかれ時のたどどしくは」(和歌 33-02)

「たそかれ時の藤の花、今度はちゃんと折れるかな」(意訳 33-02)

\*注に<夕霧の返歌。本当に伺ってよいのでしょうか、というのが表面の意。「(花を)折る」には結婚する、の意がこめられている。>とある。藤原邸の藤の花を折るのは、確かに畏れ多い気もする。

と聞こえて(と返歌して)、

「\*口惜しくこそ臆しにけれ(図らずも気後れして、思うように詠めません)。取り直したまへよ(上手く取り繕って下さい)」 \*是は係り結びの文型で、「臆しにけれ」は「ば」の順接で<然も能はず>などが続くのだろう。注には<以下「取り直したまへ」まで、夕霧の詞。意の満たないところの取りなしを柏木に依頼。>とある。従って、下文を補語する。

と聞こえたまふ(と宰相君は頭中将に頼み申しなさいます)。

「御供にこそ(御供いたしましょう)」とのたまへば(と藤中将が仰れば)、

「\*わづらはしき隨身は(窮屈な護衛は)、否(いな、いりません)」とて(と中将同士ならではの軽口で応えて)、返しつ(宰相君は頭中将を先に返しました)。\*「わづらはしき隨身」については、注に<夕霧の詞。拒否。柏木が中将なので戯れて大袈裟に言ったもの。>とある。従って補語する。

大臣の御前に(そして源氏殿の居間に進んで)、かくなむ、とて(こういう次第ですと申して)、\*御覽ぜさせたまふ(藤原殿の御文を御覧に入れなさいます)。\*「御覧ぜさす」の「さす」は<使役の助動詞>の語用ではあったらしいが、「御覧ず(御覧になる)」が尊敬語なので、その未然形に「さす」の付いた「御覧ぜさす」は使役の意を取れずに<御覧に入れる>という尊敬語になる、らしい。紛らわしい。

「\*思ふやうありてもものしたまひつるにやあらむ(他家との縁談を仄めかせば強がっても居らっしゃれますまいという、此方の思い通りに先方が折れていらしたようだな)。さも進みものしたまはばこそは(この線で藤原殿がことを進めなざるとすれば)、過ぎにし方の孝なかりし\*恨みも解けめ(大宮への不届きな振る舞いをしたる遺恨も解けるだろう)」 \*「思ふやうありて」は<狙い通りに、作戦が功を奏して>という意味の成句のような言い回しなのだろう。ということは、梅枝巻第三章第二段で

源氏殿が宰相君に言った「かのわたりのこと、思ひ絶えにたらば、右大臣、中務宮などの、けしきばみ言はせたまふめるを、いづくも思ひ定められよ」は、初めから内大臣に揺さぶりを掛けるための芝居だったワケだ。いや、右大臣家や中務宮家からの縁談話はあったのだろう。全くの架空では説得力はない。ただ、源氏殿も君の本命が藤原姫である事を承知の上で、他家にも少し考えてみるみたいな含みの在る答え方をしたのだろう。そういえば、殿が君にした<結婚についての教訓>なるものも、本気で言っているとは思えないような所が多く違和感を覚えたが、これこそが芝居で、殿が君に本気で説得しているかのような話を、内大臣に<人伝てに>聞かせることこそが真意だったようだ。中途半端に昔話を持ち出すのも、中途半端に事情を知っていそうな内大臣にこそ説得力のある話に仕立て上げる為の工夫だったのだろう。そういえば、肝心な話は一つもなく、夕顔に関しては微塵も話題していなかった。何だ。そういうことだったのか。やっとなにに落ちた。\*「恨みも解けめ」は殿が君に話しているのだから、先ずは<おまえの恨みも少しは晴れるだろう>という君への労わりであり、また<私の憤まんも収まるだろう>という自分の納得でもあるだろうが、内大臣に対しても<自身の罪滅ぼしになるだろう>という意味も込められたような語感を感じる。

とのたまふ(と殿は仰います)。\*御心おごり(そのしたり顔たるや)、こよなうねたげなり(何とも小憎らしい)。\*「御心おごり」は<思い上がり、慢心、驕慢>とあるようだが、此处での「おごり(驕り)」は<作戦成功の高揚感>であり、その「作戦」が小細工を弄した<罠>だったので、相手を上手く落し入れて出し抜いた<優越感=したり顔>だったのだろう。

「さしもはべらじ(さあどうでしょうか)。対の前の藤(とにかく対屋の前庭の藤が)、常よりもおもしろう咲きてはべるなるを(例年に無く見事に咲いているところなので)、静かなるころほひなれば(公務も手隙な今の内に)、遊びせむなどにやはべらむ(演奏会でもしようということのようです)」

と申したまふ(と君は応えなさいます)。

「わざと使ひさされたりけるを(わざわざ頭君を遣いに寄越しなされたのだから)、早うものしたまへ(早く支度なさい)」

と\*許したまふ(と殿も穏やかに仰います)。\*「ゆるす」は<緩める>で勝者の余裕を示した言い方なのだろう。「ゆるす」を<承諾>と解しても大筋の意は通るが、この空気感を味わないと読んだ甲斐がない。

いかならむと(どうなることだろうと)、下には苦しう(君は内心で期待と不安で一杯になって)、ただならず(平静ではられません)。

「直衣こそ(なほしこそ、その上着だが)あまり濃くて(色が濃すぎて)、軽びためれ(安っぽい)。非参議のほど(非参議の内とか)、何となき若人こそ(役職の無い若者なら)、\*二藍はよけれ(その二藍でも良いが)、\*ひき繕はむや(ちゃんとしないと)」 \*「二藍」はタデ草の藍染(紺色)とベニバナの藍染(赤色)の重ね染めで、赤紫から青紫までの幅がある色合い、とのこと。その濃くて派手な色とは赤が強いのだろうか。地味にしていけば青ねずとか、その使い込んだ白っぽいものとかを想像する。\*「引き繕ふ」は<欠点を直す。取り繕う。体裁を整える。>と古語辞典にある。晴れの席なのだから、事改まって<服装を正す>ということなのだろうが、「ひき繕はむや」の口調は親が子供を注意する<ちゃんとしなさい>に聞こえる。



とて(と言って殿は)、わが御料の心ことなるに(ご自分用の特に良い上着に)、えならぬ御衣ども具して(上質の内着類を添えて)、御供に持たせてたてまつれたまふ(君の御付きの者に部屋に持ち帰らせて着替えさせなさいます)。

#### [第四段 夕霧、内大臣邸を訪問]

わが御方にて(君はご自分の部屋で)、心づかひいみじう化粧じて(念入りに身繕いして)、たそかれも過ぎ(黄昏時も過ぎて)、心やましきほどに参うでたまへり(内大臣家が待ち侘びるほどの時分に参上なさいました)。主人の君達(あるじのきんだち、ご子息たちが)、中將をはじめ(長男の中將をはじめとして)、七、八人うち連れて迎へ入れたてまつる(七、八人打ち揃ってお出迎え申しなさいます)。いづれとなくをかしき容貌どもなれど(何れ劣らぬ美男子揃いですが)、なほ(やはり宰相君が)、人にすぐれて(他に勝って)、あざやかにきよなるものから(際立って端正ながら)、なつかしう(親しみがあって)、よしづき(教養深く)、恥づかしげなり(女房目に気後れする御姿です)。

大臣(内大臣は)、御座(おまし、宰相君の御座所を)ひきつくろはせなどしたまふ御用意(改めて整えさせたりなさる御配慮に)、おろかならず(余念がありません)。\*御冠などしたまひて(衣冠装束に着替えなさって)、出でたまふとて(庇の間で宰相君の前へ出為さるということで、いったん母屋に下がって其処から襖の隙間を示して)、北の方、若き女房などに、\*「おんかうぶり」は注に<直衣姿は烏帽子を着けるが、束帯姿の時の冠を着けて、内大臣は改まった態度を示した。>とある。

「覗きて見たまへ(覗いて御覧なさい)。いと警策にねびまさる人なり(全く驚くほど立派になった人ですよ)。用意などいと静かに(物腰もとても落ち着いて)、ものものしや(貫禄がある)。あざやかに(こう際立って)、抜け出でおよすけたる方は(他の者を追い抜いて出世の早いことについては)、父大臣にもまさりざまにこそあめれ(源氏殿にも勝っているのではないか)。

かれは(かの大臣は)、ただいと切になまめかしう愛敬づきて(ただもう実に優雅で明るく)、見るに笑ましく(会えば楽しく)、世の中忘るる心地ぞしたまふ(政治問題など無いような気にさせられる)。公さまは(それで公務に於いては)、すこし\*たはれて(少し弛んで)、あざれたる方なりし(大雑把で詰めが甘いのも)、ことわりぞかし(無理はない)。\*「たはる」は「戯る」と表記され、意味も「たはむる、たはぶる」と同じく<ふざける、遊ぶ>と古語辞典にある。「あざる」も「戯る」だから、これはもう自分の語感で言い換えるしかなさそうだ。

これは(この宰相君は)、才の際もまさり(学業優秀で)、心もちる男々しく(性格も男らしく)、すくよかに足らひたりと(しっかりしていて申し分ないと)、世におぼえためり(世間の評判も高いようだ)』

など\*のたまひてぞ(などと接し方の注意を念押しなさってから)、対面したまふ(対面なさいます)。\*「のたまひてぞ」の「ぞ」は念押しだ。何を念押ししたのかと言えば、七年前の女房たちの無礼もあったことだし、これからは大事な婿殿なのだから、くれぐれもそのつもりで接するように、という注意だ。マ、本質的には自分に対する戒めだろうが。補語する。

ものまめやかに(畏まった)、むべむべしき御物語は(堅苦しいご挨拶は)、すこしばかりにて(短く済ませて)、花の興に移りたまひぬ(花見の宴会に移りなさいました)。

「春の花いづれとなく(春の花はどれを取っても)、皆開け出づる色ごとに(皆花びらを開いて出して見せる色それぞれに)、目おどろかぬはなきを(目覚しくない物など無いが)、心短くうち捨てて散りぬるが(気短であっけ無く散ってしまうのを)、恨めしうおぼゆるころほひ(残念に思える晩春に)、この花のひとり立ち後れて(この藤の花だけが咲き遅れて)、\*夏に咲きかかるほどなむ(夏にかけて咲いているのは)、あやしう心にくくあはれにおぼえはべる(なんだか気配り上手で印象深いところですよ)。色もはた(色もまた紫ということで)、なつかしき\*ゆかりにしつべし(お近づきの標にするには相応しいわけです)」 \*「夏に咲きかかる」は注に<「夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな」(拾遺集夏、八三、源重之)をふまえる。>とある。この歌は<ナツにこそ先に咲き架かっていたんだね藤の花は、マツの枝に蔓を絡ませて寄り掛かってばかりいるものと思っていたよ>というダジャレ、という解釈で良かったでしょうか。って、誰に聞いてんだか。って、いうくらいバカバカしい明るさで藤原殿にピッタリ、っていう感じ。 \*「ゆかり」を象徴する色が紫で、藤の花は紫。ただ、なぜ紫が「ゆかり」なのかの根拠は「紫のひととゆゑに武蔵野の草は皆がらあはれとぞ見る」(古今集・雑歌・867)とされるが、それなら紫は<あはれ>を表していそうで、なぜ「ゆかり」かは是では分からない。何かもう一つ下の謂れか、武蔵野や紫草に因んだ大事件のようなものでもあって広く認識されたのか、にしても根拠が伝わらないのはあやしい感じ。また、「ゆかりにす」も実用上は問題ないだろうが、理屈の上では注意を要する言い方だ。「ゆかり」は<縁故、関係>という認識であって、それを考える事は出来るが、それは直接働きかけることが出来る対象体ではなく、協調行動や約定に裏付けされた信頼感だ。その信頼感をお互いの共通認識であろうと記念して印象付けるのが、儀式でありお印の品物というわけだ。だから、「ゆかりにす(縁にする)」は「ゆかりのしるしにす(縁を持った標にする)」と言うべきなのだろう。尤も、藤原殿と宰相君はもともと伯父と甥の間柄で、姫と君も従姉弟同士だが、此处での焦点が二人の結婚なのは明白なので、此处で言う<縁にする>は意図が十分に伝わる言い方ではある。ケジメには厳しくても、理詰めは一通りで済ませる藤原殿にピッタリの風流な言い回し。有能な実務政治家の資質だろうか。

とて(と内大臣は)、うちほほ笑みたまへる(にっこりなされた)、けしきありて(機嫌の良さで)、匂ひきよげなり(表情は晴れやかでした)。

#### [第五段 藤花の宴 結婚を許される]

月は\*さし出でぬれど(月は出ていても)、花の色さだかにも見えぬほどなるを(花の色がはっきりとは見えないほの暗さだったものの)、\*もてあそぶに心を寄せて(皆この和睦の宴に喜んで)、大酒参り(おほみきまゐり、御酒を召し上がり)、御遊びなどしたまふ(楽器演奏などを為さいます)。 \*「さし出づ」は<はっきりと出る>だから正中か、その前後の時刻なのだろう。この日は四月七日と次の段に在るようだが、因みに暦計算ページで見ると、今年の京都の五月で月齢七日は10日あたりだったようで、その日の月の出は午前11時、入りは深夜の0時、南中は夜の6時ぐらいだったらしい。しかし、その日の日の入りが夜の7時くらいだったらしいので、月が見えるのは寧ろ其の頃で、宴会はざっと19:30あたりを考えて置く。 \*「もてあそぶ」は動詞<接待する>の連体形言い切りの名詞化で、一般名詞の「もてあそび」とは違って、実際に<固有の人を接待すること>を意味し、此处では即ち<源氏君を婿がねとして接待すること>を示す。が、「心を寄す」は<皆が同じ思いになる>だろうから、是は<内大臣や君達だけがこの宴席の主旨を心得る>のではなく、源氏君も含

めてこの場の出席者の＜全員が和睦を喜んで宴に打ち興じた＞という描写のようなので、「もてあそぶ」は＜この和睦の宴＞という場を表す引いた言い方にする。

大臣(藤原殿は)、ほどなく\*空酔ひをしたまひて(早々に酔った振りをなさって)、乱りがはしく\*強ひ酔はしたまふを(無闇に酒を勧めて源氏君を酔い潰そうと為さるのを)、\*さる心して(君は失態を恐れて)、いたう\*すまひ悩めり(断るのにととても困っていたようです)。\*「空酔ひ」は「そらゑひ」との読みで＜酔った振り＞と古語辞典にある。\*「強ひ酔はず」は「しいゑはず」の読みで＜酒を無理に勧めて酔わそうとする＞。その内大臣に特別な意図はあるのか。しかし今さら内大臣に、源氏殿の魂胆を見抜いた上で折れたに違いないのだから、悪意の有る筈も無く、宰相君の寝込みを襲う心算でもないだろうから、正体を無くしては介抱し介抱されで、隠し様も無く素を曝し合って真の家族として付き合おうという姿勢なのだろう。が、源氏君はまだ、どこか力みが抜けない。\*「さる心す」は＜然るべき用心をする＞で＜ボロを出さないようにする＝失態を恐れる＞のだろう。\*「すまふ」は「争ふ」と表記され、相撲に通じる言葉らしく＜組み合う、張り合う＞とあり、駆け引きという事なのか交渉ごとで＜断る、否む、辞退する＞という意味にもなるらしい。

「君は、\*末の世にはあまるまで(末世には過ぎるほどの)、天の下の有職にものしたまふめるを(天下随一の知識人でいらっしゃるが)、齢古りぬる人(よはひふりぬるひと、この老人を)、\*思ひ捨てたまふなむつらかりける(労わり下さらないのは悲しいです)。\*「すゑのよ」は＜道義や仏法がすたれ、人の心がすさんだ世の中。末世(まっせ)。＞と大辞泉にある。「末世」は＜仏教で、末法の世。釈迦(しゃか)入滅後の仏法の衰えた世。＞とあり、仏教思想は知らないが、ざっと、理想とは違って問題が多い世の中、というように聞こえるので、つまりは＜この世の中の現実＞のことなのだろうが、こうした唐の先進思想を踏まえた知識人のような言い方を、多分にわざと仰々しい冗談半分の口調として、当時の大臣がしたという記録性は重視したい。\*「思い捨つ」は＜見捨てる、見過ごす、見限る＞などだろうが、「老体を見捨てる」は＜思い遣りが無い＞とかく容赦なく責め立てる＞という言い方なのだろう。尤も、内大臣こそが天下随一の實力者なのであり、確かに年齢こそ推定で45歳と当時としては高齢だが、とても「老人」だと思える人ではないが。

\*文籍にも(漢書の教科書にも)、家礼といふことあるべくや(父と子の礼を尊ぶべしとあるでしょう)。\*なにがしの教へも(孔子の謙虚さを説く教えも)、よく思し知るらむと思ひたまふるを(良く御存知かと存じますが)、いたう\*心悩ましたまふと(ずいぶん其れに反しなさんと)、恨みきこゆべくなむ(不満に思い申さざるを得ませんでした)。\*「文籍(ぶんせき)にも家礼(かれい)といふ」は、注に＜『史記』「高祖五日に一たび大公に朝すること、家人父子の礼の如し」(高祖本紀)を踏まえた表現。父子の礼をいう、すなわち舅と婿との関係であることをいう。＞とある。事務官登用の国家試験に受かった文章生でもある源氏君に対して、内大臣が大学寮の教科書たる漢籍を持ち出して愚痴る、という場面のように、才女の片鱗を覗かせる筆致なのかも知れない。\*「なにがしの教へ」は注に＜聖賢の教え。儒教をさす。＞とある。「儒教」は＜孔子が唱えた道徳・教理を体系化したもの。その学問内容を儒学という。儒教は、その国家教学としての規範性・体系性を強調した称。＞と大辞泉にある。ざっと、国家規律は武力ではなく学力を基とした合理的合意によって図られるべきであり、為に個人の根本姿勢に謙虚さという倫理が求められる、といった考え方らしく、具体的には細かな生活教条が規定されることによって宗教化した思想体系といったもののように、「なにがし」というのはそれらの「教条」を理論付けた諸氏を指し、「なにがしの教へ」は其の総体が＜「儒教」を成している＞という認識を示した言い方、のようにも見えるが、どう言っても難しそうなので、字面が簡単なく孔子の謙虚さを説く教え＞にして置く。ただ、「謙虚さ」を＜謙虚に＞人に諭すのは至難だ。\*「心悩ます」は一般的には＜困らせる、苦しめる＞だろうが、

此处での「心」は<「なにがしの教へ」の主旨>で、「なやます」は<萎えさせる＝力なくさせる＝骨抜きにする>で、「心悩ます」は<論旨を損なわせる>という理屈なのだろう。

などのたまひて(などと大臣は仰って)、酔ひ泣きにや(酔った所為で涙もろくなかったかを装った弱気口調で)、をかしきほどにけしきばみたまふ(実は反論のしようもない厳しい非難を、道化めかして率直にお示しなさいます)。

「いかでか(どうしてそんな)。昔を思うたまへ出づる\*御変はりどもには(お祖父様お祖母様の在りし昔を思い出しますお身代わりに伯父上を思っておりますので)、身を捨つるさまにもとこそ(その御恩に報いるためには、わが身を捨てるようにしてお仕え申そうと)、思うたまへ知りはべるを(存じ上げておりますものを)、いかに御覧じなすことにかはべらむ(そのように御覧になっていらっしゃったとは)。もとより(すべては)、おろかなる心のおこたりにこそ(私の思い至らない未熟さによるものです)」 \*「御変はりども」は複数だから<お祖父様お祖母様の身代わり>ということだ。こういう言い方は現代語にはないので非常に言い換えしにくい。しかも其の上に、この文は構文がややこしい。基本文は「(大臣を)昔を思うたまへ出づる御変はりどもに思うたまへ知りはべる」で、「は、身を捨つるさまにもとこそ」が挿入句で、さらにこの総体を目的格にして「を、いかに御覧じなすことにかはべらむ」と驚いて見せている。「身を捨つるさまにもとこそ」は<祖父祖母への御恩に報いるためにも>という意を込めた殊勝な言い方だが、意図するところは血縁関係の強調だ。内大臣の非難に理屈では抗し得ない。甥のクセに伯父に対して不遜だ、という言い方に対しては、御説ご尤もと言うしかない。が、其れは言えない。仲を引き裂いたのは誰だったのか。要するに、実態は意地の張り合いだったのであり、良し悪しを言い出して納まる話ではない。こうして血縁の誼を持ち出して円満を図るのが良策だし、唯一の解決法だ。だから源氏君の応対は正しい、ワケだが、血縁の誼を持ち出して最初に和睦を図ったのは内大臣の方だ。極楽寺の大宮三回忌の後で藤原殿は源氏君に「今日の御法の縁をも尋ね思さば、罪許したまひてよや」と根競べの負けを認めて、姫との結婚を持ちかけた。いや、だからこそ、源氏君に一度は本音を聞かせて置きたい藤原殿の気持ちも分かるような気がするし、此处で最初から物分りの良い顔を見せるのはラシクナイし、却って陰に籠もった印象にもなりそうで、この率直さは耕しとしてアリなのだろう。万事目出度しだ。

と、かしこまりきこえたまふ(宰相君は畏まってお応えなさいます)。

御時よく(君の御態度に納得なされたのか、大臣が頃合いを見計らって)、さうどきて(陽気に)、「\*藤の裏葉の」とうち誦じたまへる(と仲直りに相応しい古歌を歌いなさる)、御けしきを賜はりて(それを合図と承って)、頭中将(長子の頭中将が)、花の色濃く(花の紫色が深く)、ことに房長きを\*折りて(特に房の長い藤の花房を折り取って)、客人(まらうと)の御盃に加ふ(の御さかずきの横に置き添えます)。 \*「藤の裏葉の」は注に<「春日さす藤の裏葉のうらとけて君し思はば我も頼まむ」(後撰集春下、一〇〇、読人しらず)>と参照紹介がある。「はるひさす(春の日は差す)ふちのうらはの(藤の枝先の花が)うらとけて(うららかに映えている、そんな風に裏心も無く打ち解けて)きみしおもはば(あなたが思っているなら)われもたのまん(私もあなたのお世話になって真心を尽くしたいけど)」ということらしい。ところで、この「藤の末葉の(ふちのうらはの)」を枕詞にして「うら(恋心)」に掛ける詠み方は、万葉集第十四卷 3504 番の「はるへさく(春へ咲く、春に咲く)ふちのうらはの(藤の末葉の、藤の可憐な花を見ると)うらやすに(心安に、安心して)さぬるよぞなき(さ寝る夜ぞ無き、ぐっすり眠れる夜も無い)ころをしもへば(子ろをし思へば、あの娘を思い出すから)」が下歌にあるらしく、「たのしい万葉集」他のサイトがいくつかヒットする。大臣の親心が滲む。 \*「折りて～加ふ」という藤中将の行為がどうして「御けしきを賜はりて」に対応したことになるのか、突飛と言うか、何か唐突な感じ

を受けたが、これが何とこの花見への招待状たる内大臣の贈歌「春の名残の藤の花、此处で色濃く咲いてます(意識 33-01)」に対する宰相君の出席回答たる返歌「たそかれ時の藤の花、今度はちゃんと折れるかな(意識 33-02)」に対する藤原家からの贈答品になっていた。周到と言うか、無駄の無い話し運び。

取りて(源氏君は盃を取って)、もて悩むに(飲み干しあぐねていると)、大臣(藤原殿がこう歌を添えて乾杯を促しなさいます)、

「紫にかことはかけむ藤の花、まつより過ぎてうれたけれども」(和歌 33-03)

「この藤の花の紫が、まつより長い免罪符」(意識 33-03)

\*注にく内大臣の夕霧への贈歌。「紫」は雲居雁をさす。「まつ」に「松」と「待つ」を掛け、「憂(う)れ」に「末(うれ)」を懸ける。「藤」と「末」は縁語。あなたを婿とすることが、藤が松の木を越えるほど長く待たされたことが恨めしい、しかし、それも藤(娘)のせいで、という。>とある。「紫」は雲居雁をさす。」とあるが、意味不明だ。むしろ、「むらさき」という言葉や其の色合いにく口実>や<言い訳>につながる謂れや意味合いでも有るのかと当たったが、「紫」が<王家のゆかり>にかすりそうな気はするものの、私の調べた範囲では確たるものは何も分からなかったし、少なくとも然程は一般的に認識されたものとしての根拠は無さそう。となると、私が理解できるこの歌の意味は<この濃い紫色の藤の花房が蔓を巻き付けた松の枝振りよりも長く垂れ下がったことに免じて、この日を厭になるほど待ち過ぎた以上にマツ藤がこの世にあるものと認め、藤家当主たる私もあなたからの結婚の申し込みを許しましょう>となり、頭中将が持ち置いた藤の花房在りきの歌という、酒の席とは言え、相当にバカバカしい大喜利ものだ。その明るさは藤原殿らしい気はするが、これが承諾表明だとしたら、本当にこの理解で良いのかという不安が残るほどの果敢なさではある。また、「うれたけれ」が現代語に無い語感なので面白味も直には伝わらない。形容詞の「うれたし」は「慨し」の表記で<[形ク]《「うれいたし(心痛し)」の音変化》憎らしい。いまましい。嘆かわしい。>と大辞泉にある。が、「末(うれ)」「猛(たける)」を<花房が伸び過ぎる>と解するのは独断の域を出ない。それに第一、「うれ」が何で「末」なのか語感がつかめない。是も勝手に「末」の「すえ」が「うれ」に訛った、と解して置くことにする。「うら」よりは「うれ」が古い言葉らしく、動詞変化もなさそう。

\*宰相(宰相君は)、盃を持ちながら(盃を持ち上げて)、けしきばかり拝したてまつりたまへるさま(形だけ拝酒なさって次のように返歌なさった様子は)、いとよしあり(実に風流です)。\*「宰相」は事務官ではなく太政官なので政治家だ。しかし、源氏君は18歳だ。その地位にあるのだから、そう呼んで差し支えないのだろうが、むしろ幼帝ほどの権威の象徴なら年少でも有り得る気がするが、また軍人なら15,6歳でも実戦に臨む將軍も、却って体力勝負なら有り得るかも知れないが、政治家の18歳は飾りにしても実務に於いても、私には違和感がある。せめて、君は付けたい。

「いく返り露けき春を過ぐし来て、花の紐解く折にあふらむ」(和歌 33-04)

「藤が松より杉るまで、待ってた甲斐が在りました」(意識 33-04)

\*源氏君の返歌。注にく「いくかへり咲き散る花をながめつつ物思ひくらす春に逢ふらむ」(新古今集恋一、一〇一七、大中臣能宣)の類歌がある。長年待ち続けた結婚の許諾が出た感激を歌う。>とある。「花の紐解く」はイヤラシイ言い回しで、是が多分「いとよしあり」なのだろう。「ひもとく」は<服の下紐を解く、打ち解ける>であり<花が開く>であり<書を開いて物事の由緒を調べる>だ。しかし、上句の<何年も実らぬ恋に涙勝ちの春を過ぐして

来て>を、下句の<やっとなんは花が開いて実の成る目に会う事が出来ました>とする、そのオチが内大臣の言った<藤が松より長い房を付けたから>というダジャレだというのは、本当にそんなんで良いの、ってツッコミたくなるほどの軽口調だ。が、それで良いのだろう。場の和やかさとバカバカしさは臨場感を持って伝わる。

頭中将に賜へば(頭中将にお流れを差し向けなさんと、こうありました。)、

「たをやめの袖にまがへる藤の花、見る人からや色もまさらむ」(和歌 33-05)

「藤の花より綺麗だと、言われて女は色気づく」(意識 33-05)

\*藤中将の唱和歌。「たをやめ」は「手弱女」と表記されくたおやかな女性。なよなよと優美な女性。たわやめ。>と大辞泉にある。花嫁になる妹姫のことだろう。「まがふ」はく似ていて見まちがう>で、姫が藤に、藤が姫に、だ。「見る」は<藤の花を見分ける>と<姫と結婚する>の複意で、「人」は花婿たる源氏君。「から」は理由説明の接続助詞で、「～からや」は<～だからだろうか>。「色もまさらむ(輝きが増すようだ)」という比較評価が述語なので、この「～からや」は<～に抛る所為だからだろうか、他に比べて>という言い方になり、源氏君の審美眼を褒めると共に、姫も喜んでいと祝福する。藤中将はなかなかの褒め上手ぶりだが、是くらいの世辞は社交界に生きる者にとっての礼儀の内なのか、源氏君に親愛の情を示したのか、その両方か。

次々順流るめれど(以下順々に盃が回されて各自唱和歌を詠んだのだが)、酔ひの紛れにはかばかしからで(祝杯に酔った混乱で上手く詠めず)、\*これよりまさらず(この歌よりも優れたものはありません)。\*「これよりまさらず」で作者が表現していることは、少なくともその主旨は、藤中将以上に気の利いた歌の有無ではなく、この祝宴が意味する構図の説明、に違いない。以下の列席者に藤中将より出過ぎた真似をする者は居なかった、という言い方だ。いや本来は、気の利いた歌を添えるのが祝意の表明になるので、各自はそれなりに工夫しただろうし、実際には面白いものがあつたかも知れない。この場の明るさからして、この場を盛り上げるに足る歌は披露されたような気がするの、寧ろ素直な読み方だろう。それでも、特筆するほどの傑作は無かったか、有っても意味は無かった。この場は歌会ではない。身内の固めの儀式だ。肝心の花嫁が居ないこと、は問題ではない。結婚が男の人生に意味することと女の人生に意味することが違うのは有性生殖が規定する当然の社会性だ。つまり、この場の社会的な意味は、藤原殿が主人で藤中将が惣領で以下の兄弟も皆その秩序を自覚しているという藤一家に、権威筋の源氏君が客分として身内入りする、ということを出席者全員が共通認識する、ということだ。源氏殿と源氏君は共謀して当て馬を立てるという一芝居を組んだワケだが、藤原殿はそれも善意と呑み込んで、その手仕舞いとしてこの場を設け、藤中将と締めし合わせて、主人が藤の歌を吟じたら惣領が藤の花房を「客人の御盃に加ふ」る手筈を整えていた、というワケだ。落とし文句が「待つ」と「松」のダジャレというのは、深刻な確執もあるだろうに、そんなことで歴史が変わる、というか、変える、ことを面白がっているようで、如何にも藤原風でチャレている。そう言えば、作者も藤式部で藤原一家だった。

[第六段 夕霧、雲居雁の部屋を訪う]

\*七日の夕月夜(なぬかのゆふづくよ)、\*影ほのかなるに(月の光がほの暗い中に)、池の鏡のどかに澄みわたれり(池の水面は穏やかに静まり返っています)。\*旧暦四月七日は新暦の今年で見ると五月十日ぐらいのようだ。初夏。\*「影ほのか」と言っても月齢七日は上弦の月で、月の形自体は良く見える筈なので、この「影」は<月の光=太陽の反射光>。

げに(なるほど桜も散った初夏の)、まだほのかなる梢どもの(まだ葉の生い茂っていない若木の枝々が)、さうざうしきころなるに(寂しげなところに)、いたうけしきばみ横たはれる松の(とても堂々とした松の大木の)、木高きほどにはあらぬに(余り高いところではない枝に)、かかれる花のさま(蔓を這わせて咲き垂れた藤の花の姿は)、世の常ならずおもしろし(非常に風情が在ります)。

\*例の(例の美声の)、弁少将(次男の弁少将が)、声いとなつかしくて(声の調子も実に親しげに)、  
「\*葦垣」を謡ふ(男が女を寝取る催馬楽の「葦垣」を謡います)。 \*「例の弁少将」は注に<柏木の弟、紅梅大納言。「賢木」巻に初出、そこで催馬楽「高砂」を謡い、「梅枝」巻では催馬楽「梅が枝」を謡う。>とある。賢木巻の「高砂」を謡う殿上童の「四の君腹の二郎」は可愛らしく印象深いが、取って付けた様な登場に見えて後世の加筆の疑いを感じたりもしたが、催馬楽は場面の描写や話の展開の重要な要素になっていることが多く、加筆も難しそうだと思い直した記憶がある。此处でもそうだろうか。 \*「葦垣」は注に<「葦垣真垣 真垣かきわけ てふ越すと 負ひ越すと 誰 てふ越すと 誰か 誰か この事を 親に 申よこし申しし とどろける この家 この家の 弟嫁 親に申よこしけらしも」(催馬楽・葦垣)。『集成』は「内大臣が結婚を許したことを口惜しく思う気持から、わが家の姫を盗んでゆくのは誰だとあてこすったもの」と注す。>とある。「今様ラプソディ・催馬楽篇」Web ページに拠ると、この歌には後半に「弟嫁」が「我は申よこし申さず(私は告げ口なんかしていない)」と言いつ返し続きが有る、ように説明されていた。弁少将が自分を「弟嫁」に準えて謡ったとすれば、面白い趣向だ。催馬楽でも短い歌は場面設定が省略された気持ちだけの部分の歌詞だけで、全体の意味がつかめないことが多い中で、この歌は「てふ越すと」みたいに厳密な意味は分からない文句が有るにしても、夜這いの筋は分かりやすい。と思つたら、この筋は第一段の「関守」の項で見た伊勢物語五段の話にそっくりだと気付いた。特に、古今集 632 番の詞書にある「かきのくづれよりかよひける」はマンマだ。で、その項では「源氏君を業平、藤原姫を高子、藤原殿を基経、の構図」とノートしたが、伊勢物語五段での五条邸の女主人は藤原順子と目され、実際の門番を藤原基経が勤めたものと解した上での見立てなので、この場面在即して見直せば「源氏君を業平、藤原姫を高子、藤原殿を順子、藤中将や藤少将が基経、の構図」と当時の読者は読んだのかも知れない。

大臣、

「いと\*けやけうも仕うまつるかな(これはまた、ずいぶんはつきりと供寝をお勧め申し上げたものだな)」 \*「けやけし」は<際立ってはつきりしている>と古語辞典にある。弁少将が「葦垣」を謡うということは、源氏君に妹姫を奪われてもこの家の者は誰も文句を言わない、と言ったようなものだ。

と、うち乱れたまひて(悪乗りなさつて)、

「\*年経にけるこの家の」 \*注に<内大臣の歌。催馬楽「葦垣」の「とどろけるこの家の」の文句を歌い替えたもの。『集成』は「古い家であるわが家の、と謙遜の意を示す」と注す。>とある。

と、うち加へたまへる御声(少将の歌に重ねて謡いなさる御声は)、いとおもしろし(実に心楽しい)。をかしきほどに乱りがはしき御遊びにて(大笑いするほど打ち解けた謡いの宴席で)、もの思ひ残らずなりぬめり(わだかまりもすっかり無くなったものようです)。

やうやう夜更け行くほどに(そうこうして夜更けると)、\*いたうそら悩みして(源氏君はひどく悪酔いした振りをして)、 \*この文の主語省略は分かり難い。尤も、語り手にしてみれば、主語省略の意図な

ど無しに、女房特有の親近話法で、此処での話題の主人公が源氏君なのを前提として、聞き手も当然に分かっているものとして、普通に語っているのだろうが、字を読む所為かその語りの呼吸までは伝わらず、此処の場面は人物が入り組んでいて、やはり明示がないと分かり難い。

「乱り心地いと堪へがたうて(気分が悪くて)、まかでむ空も(帰り道も)\*ほとほとしうこそはべりぬべけれ(覚束無いほどです)。宿直所譲りたまひてむや(休憩室を貸して下さいな)」 \*「ほとほと」は<危うく>とある。命拾い、の語感か。

と、中将に愁へたまふ(藤中将に訴えなさいます)。

大臣、

「朝臣や(あそんや、じゃあ御前)、御休み所求めよ(御休み所を探しなさい)。翁(おきな、この爺は)いたう酔ひ進みて(ひどく酔いすぎて)無礼なれば(むらいなれば、みっともないので)、まかり入りぬ(奥へ下がることにする)」

と言ひ捨てて(と言って)、入りたまひぬ(お下がりなさってしまいました)。

中将、

「\*花の蔭の旅寝よ(君は花に添い寝の旅の宿という訳か)。いかにぞや(どうしたもんかな)、苦しきしるべにぞはべるや(これじゃまるで女郎屋の番頭で、辛い案内役になったもんだよ)」 \*「花の蔭の旅寝よ」は注に<以下「はべるや」まで、柏木の詞。「花」は雲居雁を喩える。案内するにあたっての冗談。>とある。特に引歌は無いようだ。「花の蔭」は<花の木蔭>だろうし、現代語で読んでも<女の部屋>を意味する。それも、この日の藤の花見は源氏君と姫との結婚許諾伺いであり、それを主人である藤原殿から許された上での客人の旅寝に供する「女の部屋」とは<妹姫の部屋>であり、其処へ後継社長と目される藤中将が源中将を案内する役回りとなったワケだ。厭味交じりの冗談でも言わないことには、場が重過ぎて遣ってられない。会話文の言い換えは場面に即して補語しないと意味を損なう。が、場を読み違えると元も子も失くす。しかし、読まないといわえないので、敢えて<女郎屋の番頭>を補語する。

と言へば、

「\*松に契れるは(藤の末葉を詠み合って、松に誓った長年の真心なんだから)、あだなる花かは(遊び半分の筈が有る訳無いって)。ゆゆしや(そんなふうには姫君を遊び女のように言うのは、下品ですよ)」 \*「松」は長寿の木で<変わらぬ心>の象徴。そして「まつ」は「待つ」であり<長年の苦節>。そして「まつ」は「末」であり<遂に適った願い>。そして「末」は「うら」であり<心=恋心=真心>。なかなか多様で含みの有る語のようだ。しかし、その「マツ」をこの「フジ」の花見に結びつけたのが内大臣のダジャレとは、並外れた藤原殿の大物振りだ。いや、しかし「並外れた」と言えば、3月11日の地震と大津波は多賀城市も襲った。少し高台にある「末の松山」が辛うじて無事だったのは、藤原殿の面目も保ったのかも知れない。恐らくはこの話のネタ元であろう歌を二首味わっておこう。「ちぎりきな(契りきな)かたみにそでを(片身に袖を)しぼりつつ(絞りつつ)すゑのまつやま(末の松山)なみこさじとは(波越さじとは)」(後拾遺・770・清原元輔)は小倉百人一首(選 藤原定家 1200年頃)の42番としても有名らしい。が、「後拾遺集」(1086年)には「心変はりて侍りける女に、人に代はりて」の詞書



があるようで、是の有る無しで歌の印象は随分違う。そして、この歌は古今集(905年)の次の歌を下敷きにした本歌取りとのこと。「きみをおきて(君を置きて)あだしころを(徒し心を)わがもたは(我が持たば)すゑのまつやま(末の松山)なみもこえなむ(波も越えなん)」(古今集・1093・よみ人知らず)は「みちのくうた」とあるので、元は東歌と言われた関東や東北地方の民謡だったらしい。

と責めたまふ(と源氏君は非難なさいます)。中将は(藤中将は)、心のうちに(内心)、「ねたのわざや(一本取られたか)」と思ふところあれど(という気がしないでもなかったが)、人さまの\*思ふさまにめでたきに(源氏君の人物像が藤原家の婿として理想通りの立派さなので)、「かうもあり果てなむ(こうなれば良い)」と、心寄せわたることなれば(二人の結婚をずっと願ってきたことなので)、うしろやすく導きつ(歓迎して源君を妹姫の部屋に案内しました)。\*「思ふさま」は<理想通り>。結局、源氏家にとっても藤原家にとっても、この結婚は「思ふさま」だったようだ。

\*男君は(姫の部屋で男として姫と向き合った源氏君は)、夢かとおぼえたまふにも(やっと夢が叶ったかと思えなさると同時に)、わが身いとど\*いつかしうぞおぼえたまひけむかし(自分がいよいよ以て責任ある立場になったことを自覚なされたようです)。\*「男」「女」の呼称は閨の場面を示す。従って、補語する。\*「いつかし」は「厳し」と表記され<いかめしい、重々しい、尊い>と古語辞典にある。

女は(源氏君をこれから自分を抱く男として見て、自身を抱かれる女と思えば姫君は)、いと恥づかしと思ひしみてものしたまふも(とても恥づかしいと思ひ込んでいらっしやるが)、ねびまされる御ありさま(すっかり大人になった御体つきは)、いとど飽かぬところなくめやすし(ますます不足無く美しい)。

「\*世の例にもなりぬべかりつる身を(失恋男と世間の笑い者にもなってしまうかねなかったこの身の上の私を)、\*心もてこそ(誠意が通じたからこそ)、かうまでも思し許さるめれ(伯父上はこうしてあなたの部屋にお通し下さるほどまでも警護を緩めなされたに違いない)。\*あはれを知りたまはぬも(だというのに、あなたはあのように私を疑った返歌を寄越して、あなたが私の気持ちをお分かりならないと言うのは)、さま異なるわざかな(変な話じゃないですか)」\*「よのためし」は大きく言えば<後世への手本>で、小さく言えば<世間の噂>で、ざっと世間に広く知られて引き合いに出される事物だろうが、良くも悪しくもだ。で、此処で言う意味は<悪い例=世間の笑いもの>。注には<以下「さまことなるわざかな」まで、夕霧の雲居雁への詞。『集成』は「恋しきに死ぬるものとは聞かねども世のためしにもなりぬべきかな」(古今六帖四、恋、一九八六、伊勢)、『完訳』は「恋ひわびて死ぬてふことはまだなきを世のためしにもなりぬべきかな」(後撰集恋六、一〇三六、壬生忠岑)を引歌として指摘する。>とある。失恋男というレッテル、だろうか。\*「心もて」の「もて」は「持つ」の已然形で順接条件の接続助詞「ば」を内意するので、「心持て」は<思いを抱けば=真心を抱いていたから>という言い方。しかし、誠実だったから許された、という言い方は<その誠実さが相手に通じたから>という作用が、不可欠なだけに言わずもがなで省略されている。が、此処ではその省略部分を言わないと発言全体の論旨を言い換えられない。\*「あはれを知りたまはぬ」は注に<「梅枝」巻の雲居雁の返歌「限りとて忘れがたきを忘るるもこや世に靡く心なるらむ」(第三章三段)を受ける。>とある。姫が源君の気持ちを疑い、中務宮家との婚儀の噂を信じたこと、を持ち出しているらしい。姫の返歌の字面は確かに源君を疑っているが、それは不安な乙女心で拗ねて見せたわけで、姫を不安にさせたのは源氏家による藤原殿の陽動作戦だったのだから、君が姫をとにかく責められた筋ではない。こういうのは犬も喰わないのだが、私はわざわざ是を、他愛無いいちやつき、などと書く。そして、梅枝巻の返歌の行を補語する。

と(と男君は)、怨みきこえたまふ(女君に恨み言を申しなさいます)。

「少将の進み出だしつる(少将が始めだした催馬楽の『葦垣』の\*趣きは(『葦垣』で私を夜這い者とからかっていた座の囃し立ては)、耳とどめたまひつや(此处まで聞こえていたでしょう)。\*いたき主かな(少将は悪い首謀者だ、そう思うでしょ)。『\*河口の』とこそ(私からすれば『河口の』とあなたの乗り気の方をこそ)、さしいらへまほしかりつれ(言い返してやりたかったところす)」 \*「趣き」は<趣向>。催馬楽「葦垣」の内容が、男が夜這って女を連れ出す歌だ、ということは、もしかすると貴家でなくても、当時は子供でも知っていた、のだろう。この「趣向」とは、この日の宴席に是を謡う座の意向だ。 \*「いたきぬしかな」は「痛き主かな、な(ひどいやつだよ、ね)」だよネ。 \*「河口の」は注に<催馬楽・河口「河口の 関の荒垣や 関の荒垣や 守れども はれ 守れども 出でて我寝ぬや 出でて我寝ぬや 関の荒垣」>と参照紹介があり、評として<『新大系』は「(夕霧が夜這いをしたのではなく)雲居雁が親の目を盗んで逢ってくれたのだと(少将に)言い返してやりたかった、の意」と注す。>とある。「河口」は歌詞の字面では「葦垣」のような具体性は無いが、「関の荒垣や守れども」という文句で<家主が外垣を見張って夜這う男から娘を守っているが>という意味を誰もが理解出来たらしく、「出でて我寝ぬや」が<娘の方が別の門から家を抜け出てきて私と共に寝ってしまったよ>となるのを面白がったようだ。この言い回しが特に風情が有るとは私には思えないが、歌としては成立していた訳だ。ところで、「寝ぬ」は「いぬ」だと「寝ぬ(いぬ、眠る)」の終止形だから<寝ている>で、「ねぬ」だと「寝(ぬ)」の連用形「寝(ぬ)」に過去の助動詞「ぬ」の付いたもので<寝てしまった>だから「ねぬ」なのだろう。この「寝ぬ(いぬ)」と「寝(ぬ)」の違いは私にはとても分かり難く、話しは逸れたが気になったのでノートした。いや、それで、この「河口」は伊勢物語六段に符合する、ように思う。六段の「芥川」は、女が抜け出してきたのではなく男が女を辛うじて盗み出したようだし、女をあばら家で雨宿りさせて男が外を見張っていたら中に居た鬼に女が食われてしまった、という奇談仕立てだが、ともかくも女を連れ出した話だ。ところで、「葦垣」も女を連れ出したようだから、伊勢物語五段の「関守」が結局は出入りが許されたという結末を見ると、話の筋としては寧ろ「葦垣」が「芥川」に近いのかもしれない。が、それでも、歌の焦点が「葦垣」は関守が邪魔立てをすること、「河口」は関守が出し抜かれること、に在るように見えて、其れが其々五段「関守」と六段「芥川」に符合するように私は思う。男の劣情に応える女の冥加こそが現世を彩る人間模様とばかりに、少将に「葦垣」で種まきさせて、それに呼応するように源氏君に「河口」を持ち出させるという手練の作者の意図は、「関守」の円満な結末や「芥川」の非業な結末という伊勢物語の筋とは別に、此处に六段に漂う陶酔感を添えようとしたことにある、ような気がする。

とのたまへば(と男君が仰ると)、女(女君は)、\*いと聞き苦し(その露骨な色気話を、とても聞くに堪えない)、と思して(とお思いになって)、 \*「いと聞き苦し」は注に<催馬楽「河口」は、親の目を盗んで女がそっと抜け出して男と共に寝たという内容だからである。>とある。まあ、これ以上一方的に此方の非を言い立てられては適わない、という気持ちはあるだろう。が、過去の行き違いは済んだ話で、今となっては他愛無い事柄だ。相手も本気で責めてはいないし、此方も本気で反論する気もない。基本的にはお互いに、その他愛無さを楽しむ会話、なワケだ。それに何も姫は、「河口」が女の乗り気を歌ったものだから、はしたなさを感じて恥ずかしかった、という訳ではなくて、また「葦垣」が男の劣情の歌だとしても、だから許せるわけでもなく、そも男もがそうするような、濡れ事を大っぴらに口にすること自体が女には憚られる、という態度を男の前では見せておく、という女の感性なのだろう。男の強い精子放出欲とは違って、女の卵子受精性は子育てを担保し得る生活安定性を求めるので、女は男に大事に思ってもらうことが重要であり、その信頼性があつた上で肉欲や性感を開放出来るので、肉欲だけを取り立てて考えることに物性が増さって信頼精神が軽視されるかの不安を覚える傾向が一般的に在るようだ。尤も、信頼関係は相手あつてのもので男にも必要で、男も女も個人差が有るので性格や性質は個別には様々だろうが、この姫の反応に同感する女房は多いのだろう。

「浅き名を言ひ流しける河口は、いかが漏らしし関の荒垣（和歌 33-06）」

「変な噂が立ったのも、あなたの口が災いよ（意識 33-06）」

\*注に＜雲居雁の贈歌。催馬楽の「河口」「荒垣」を詠み込む。「河口」に夕霧の「口」の意をこめる。「浅き」「流し」は「河」の縁語。「漏らし」は「関」の縁語。＞とある。「関の荒垣」と催馬楽「河口」の歌詞を踏まえて言葉遊びをしているのだから、すっかり男君の誘いに乗って興じてはいて、だからこそ売り言葉を買って見せた、といったところか。表意は＜濡れ事を謡う「河口」という催馬楽は女を取り逃がした外垣の見張り番の話でしたね＞くらいだろうか。裏意は、男君が言った「あはれを知りたまはぬも（あのように私を疑った返歌を寄越して、あなたが私の気持ちをお分かりならないと言うのは）、さま異なるわざかな（変な話じゃないですか）」に対する反論なので、「浅き名を言ひ流しけるかは（浮名を流してしまったのは）口はいかが漏らしし関の荒垣（あなたの口が門外に関を切って何かそれらしいことを言い漏らしたからよ）」ということらしい。この「言い漏らし」は六年前の内大臣の引き裂きに遭った事に対する恨み言であると同時に、この一ヶ月前に俄かに持ち上がった中務宮家との縁談話も芝居だとばれていると難じているのだろう。そういう含みを思わせる巧妙な詠み方だ。ただ、どうせ興に乗じたのなら、男君の色事口調のままに態を崩して体を弄ばれる流れは拒んで焦らせて見せた、という読み方をして、女君が「そんな濡れ事ばかり言っているなんて、外垣の関守を気取る兄たちが世間にあなたを何と言っているか分かりませんよ、口は災いの元ですから」と姉さんらしく弟をたしなめた、のだとしたら楽しい。

あさまし（イヤラシイシハシタナイ）」

とのたまふさま（と仰る様子は）、いと\*こめきたり（いたって固さを崩しません）。 \*「こめく」は「子めく」で＜子供っぽく見える、無邪気だ＞という動詞、とのこと。しかし姫は、「葦垣」や「河口」の催馬楽が分からないのではなく、分かった上で「あさまし」と言っているのだから無邪気なのではなく、計算ずくで男を焦らそうと、こうして「子めき」で＜蒲魚ぶる＝性愛に疎い初心を装って見せる＝乙に澄ます＞のだろう。若い男女の六年ぶりの情交に際して、初々しく恥らう、ことこそが実にイヤラシイ。姫も心得たものだ。

すこしうち笑ひて（男君は思わず顔をほころばせて）、

「漏りにける岫田の関を、河口の浅きにのみはおほせざらなむ（和歌 33-07）」

「河口が浅くなったのは、積もり積もった砂の所為（意識 33-07）」

\*注に＜夕霧の返歌。「関」「河口」「浅き」の語句を受けて「河口（わたし）の浅きにのみは仰せざらなむ」、あなたの父親のせいでもありますよ、と返す。「もり」に「守」と「漏り」を掛ける。＞とある。「岫田の関」は「くきたのせき」と読みがあり、枕草子百七段にも挙げられる地名らしく、「岫田の関」を Web 検索すると其れに関連したページの幾つかがヒットする。また、当歌に関したページもあり、「岫田の関」は伊勢に在った「川口の関」の別名と注されるものもあるものの、最も頼るべき本文には注釈が無く、辞書にも項目は無いが、寧ろ当歌の詠み方から逆推して、「岫田の関」は川の氾濫で渡し止めになったことが多かった、と考えるべきなのかも知れない。そうでなければ、この言い回しがシャレにならないだろう。だとしても、「くきたのせき」の語用意図は分かり難い。で、こじ付けみたいな苦し紛れに考えたのが、「くく（潜く、もれる）」の連用形「くき」に「他」を付けて「くきたの＝漏れた他の」という読み方。で、「守りにける潜き他の責を」が＜見張っていても取り逃がした他の人の責任を＞となり、「かは口の浅きにのみは負ほせざらなむ」が＜何をかは言った私の浅はかさだけに負わせないでほしい＞となる。

\*年月の積もりも(それで川が溢れても)、いとわりなくて悩ましきに(如何することも出来ない  
ので)、ものおぼえず(何とも言いようがありません)」 \*「年月の積もり」は和歌の意識に込めてしまっ  
たので、此処の言い換えは和歌の「漏りにける」を引っ張って来た。我ながら勝手に過ぎると思うが、作者の言い  
回しでも、この歌はこの添え句の「ものおぼえず」までを含めた上で洒落が成立していて、和歌の部分だけの表意は  
「川が溢れて通れない岫田の関は河口が浅い所為だけじゃないだろう」でオチが無く、裏意も込みでやっとうにか  
和歌の体裁が付いているもので、和歌本体を独立させた表裏一体での現代語への言い換えは出来ず、出来る位なら  
言い換えは不要で、且つ裏意の意識は訳文掲載が有るので、ヒネクレ者の私は敢えて表意で言い換える。そして作  
者は必ずや、下文にその<川の水のほとばしり>を浴びせ掛けている、と私は確信する。

と(と男君は)、酔ひにかこちて(酔った所為にして話を打ち切り)、苦しげにもてなして(溢れ  
るような性欲で、狂おしいほど体を貪り合って、言い漏らしては濡れ漏らし)、明くるも知らず  
顔なり(朝になるのも気にしないほどでした)。

人びと(女房たちが)、\*聞こえわづらふを(お帰り準備のお声掛けを申しかねて困っていると)、  
大臣(藤原殿は)、「したり顔なる朝寝かな(勝利の心算の朝寝か)」と、\*とがめたまふ(勘繰りな  
さいます)。 \*「聞こえわづらふ」は誰が誰に何を言い出しかねているのか分かり難い。が、こういう時の対象体  
は話題の主、主人公である可能性が高く、今の話題で言えば源氏君であるらしい。それと周囲の状況として、大臣  
が見かねている様子なので、結婚前に娘の部屋に男が朝まで居る事を不快に思っている、ののだと考えれば、「人びと」  
は姫の部屋付きの女房たちで、源氏君に帰りの準備を急がせたい場面らしい、と推測できる。 \*「とがむ」は<責め  
る、非難する>の他に<気にする、怪しむ、問題視する>がある。

されど(それでも男君は)、明かし果てでぞ出でたまふ(朝がすっかり開け切る前にはお帰りな  
さいます)。\*ねくたれの御朝顔(寝乱れた艶っぽい朝の御顔は)、見るかひありかし(寿命が延び  
る気がする素晴らしさなのでした)。 \*「ねくたる」は<寝乱れる>という動詞。

#### [第七段 後朝の文を贈る]

御文は(源氏君からの後朝の御文は)、なほ(藤原殿のお許しを得たものの、それでもなお遠慮  
して)忍びたりつるさまの心づかひにてあるを(人目を忍んだ文遣いから女房伝手での心遣いを  
して届けられたが)、なかなか(許されない恋に逢いたさを募らせていた以前と違って、若君の肌  
のぬくもりを思い出せば言葉にならず、却って)今日はえ聞こえたまはぬを(姫は今日は何もお返  
事申しなすることが出来ないのを)、もの言ひさがなき(噂話好きの)御達(ごたち、女房たちが)  
つきじろふに(袖を突付き合って、昨夜の源氏君と姫の様子を取り沙汰している所に)、大臣渡り  
て見たまふぞ(藤原殿がお部屋にいらっしゃって手紙を御覧になるというのは)、いとわりなきや  
(姫にはとても困ったことです)。

「\*尽きせざりつる御けしきに(言い尽くせないほど素晴らしかったあなたに比べて)、いとど  
思ひ知らるる身のほどを(ますます思い知らされる我が身の程度を)、堪へぬ心にまた消えぬべき  
も(至らないと思えば改めて消えるべきかと気弱になります)、 \*「尽きせざりつる」は<尽きること  
が無い様子だった>だが、誰が何を「尽きせぬ(終わらない←どんどん沸き起こる)」「り(状態)」「つる(だった)」と思  
ったのか。それは源氏君が藤原姫の「御けしき」に対して思ったことだ。その「御けしき」は<御意向>や<御気分>

の場合もあるが、昨夜は実際に会ったのだから、君が見た「御けしき」は姫の＜御姿態＞だ。つまり、「尽きせざりつる御けしき」は＜何度もイッた姫の性反応＞を見た源氏君が刺激され続けて＜愛し尽くせなかった＞と思った＜姫の体＞なのだが、これを上品な言い方に整えれば＜言い尽くせないほど素晴らしかったあなた＞だ。

とがむなよ忍びにしぼる手もたゆみ、今日あらはるる袖のしづくを」(和歌 33-08)

悔し涙が止まっても、嬉し涙が止まらない」(意識 33-08)

\*「とがむなよ」は粗相の許しを乞う言い方。「粗相」とは、袖に付けた涙の染み。「忍ぶ(隠す)」為にきつく絞ったのは会えない故の＜悔し涙＞。今日は会えると油断したら＜嬉し涙＞で袖が濡れていた、っつか。

など、いと\*馴れ顔なり(とても馴れ馴れしい文面です)。\*この文面は見ようによっては気取った言い方とも取れそうだが、昨日の姫に何があったかを知る者にとっては実に明け透けな物言いだ。そして殿は知っている。姫は赤面もので、極まり悪さはこの上ない。

うち笑みて(大臣はにっこりして)、「手をいみじうも書きなられにけるかな(字をととても上手にお書きなさるようになったものだな)」などのたまふも(など、と宰相君の成長ぶりを子供を見るように、仰るのにも)、昔の名残なし(昔の遺恨はありません)。

御返り(姫がお返事を)、いと出で来がたげなれば(とても書けなさそうなので)、「見苦しや(そのように取り乱しては、みっともないぞ)」とて(と言って)、さも思し憚りぬべきことなれば(そうは言っても、自分が居ては姫が、気兼ねなさってしまうので)、渡りたまひぬ(お帰りになりました)。

御使の禄(文遣いへの褒美は)、なべてならぬさまにて賜へり(並大抵ではなく丁重に与えられました)。中将、をかしきさまにもてなしたまふ(頭中将が優雅におもてなし為さいます)。常にひき隠しつつ隠ろへありきし御使(今までずっと手紙をひた隠して自身も隠れ歩いていた御文遣いは)、今日は、面もちなど(今日は顔つきも)、人びとしく振る舞ふめり(人並みに晴れやかにしているようです)。\*右近将監なる人の(右近衛府の現場指揮官で)、むつまじう思し使ひたまふなりけり(宰相君が親しんで使いなさる人でした)。\*「右近将監」は「うこんのぞう」と読みがある。「ぞう」は「じょう」に同じとあり、「じょう」は「判官(四官制における三等官)」で、省では「丞」、兵衛府・衛門府では「尉」、近衛府では「将監」と表記する、と古語辞典にある。指揮官だが、作戦ではなく実戦の実務官だ。尤も、近衛府だから実戦は歌舞らしいが。

六条の大臣も(源氏殿も)、かくと聞こし召してけり(昨日の花見の事の次第は御付きの従者からお聞き知りになっていました)。宰相(宰相君が)、常よりも光添ひて参りたまへれば(いつに増して晴れやかに殿のお部屋に参上なされたので)、\*うちまもりたまひて(見据えなさって)、\*「うちまもる」は＜その場で見定める←見据える＞。

「今朝はいかに(気分は如何だ)。文などものしつや(手紙は書いたのか)。賢しき人も(さかしきひと、賢人と言われた人でも)、女の筋には乱るる例あるを(女関係では失敗する例もあるものを)、人悪ろくかかづらひ(見苦しくこだわって)、心いられせで過ぐされたるなむ(焦れて早ま

ることもせずにお待ちになったのは)、すこし人に抜けたりける御心とおぼえける(少し人より抜きん出た御資質と見受けました)。

大臣の御おきての(藤原殿の御主張が)、あまりすくみて(あまりに頑なで)、名残なくくづほれたまひぬるを(跡形なく取り下げなされたことを)、世人も言ひ出づることあらむや(世間も噂立てることだろうな)。さりとても(だからと言って)、わが方たけう思ひ顔に(勝ち誇った顔で)、心おごりして(いい気になって)、好き好きしき心ばへなど漏らしたまふな(色男ぶった素振りなど見せなさいますな)。\*「好き好きしき心ばへ」は<浮気の意向>だろうか。そんなことを養父には言わないのが普通で、此处でわざわざ「漏らしたまふな」と殿が君に言うような事なのだろうか。少し政治的に考えると<気の多そうな態度>は<他勢力との協調をちらつかせて交渉を有利に運ぶ作戦>で、まるで今回の婚儀の当て馬大戦略のことようで、殿自身が仕組んだことなのだから、是を諫めても説得力はない。で、素直に読めば是の文は、今回の勝利で囃に乗って<風流めいた仕種>はするな、という訓戒なのだろうから、一般的な意味で<何でも思い通りになるとするな→自惚れるな→色男ぶるな>という言い方、かと思う。

さこそおいらかに(このように大らかに)、大きな心おきてと見ゆれど(心の広い御判断と見えても)、下の心ばへ男々しからず癖ありて(藤原殿は内心では男らしくなく恨みを根に持つ癖があって)、\*人見えにくきところつきたまへる人なり(人に迎合しない所がある人です) \*「人見え難し」は<他人から見てその人の性格が分からない>のか<その人が他人に合わせることがない>のか分かり難い。ただ、「分からない所がある」という言い方は一般的過ぎて面白くないので、後者にして置く。

など、\*例の教へきこえたまふ(以前のように女扱いについて指導申しなさいます)。\*「れいの」と言っても、以前の結婚講座は芝居だったのだから、是は語り手の軽口だ。

ことうちあひ(上首尾を見て)、めやすき御あはひ(君と姫を似合いの夫婦)、と思さる(と源氏殿は御思い為さいます)。

御子とも見えず(宰相君が御子息とも見えず)、すこしがこのかみばかりと見えたまふ(殿は少しほど年上の兄とばかりに見えなさいます)。ほかほかにては(別々には各々)、同じ顔を写し取りたると見ゆるを(同じ顔を写し取ったものと見えるが)、御前にては(御並びになると)、さまざま(それぞれが)、あなめでたと見えたまへり(何と素晴らしいと見えなさいました)。

大臣は(源氏大臣は)、\*薄き御直衣(ねずみ掛かった青紫色の上着に)、白き御衣の唐めきたるが(白い内着の唐織めいたものが)、紋けぎやかにつやつやと透きたるをたてまつりて(紋様がはっきりと出てつやつやと光沢があるのを着付けなされて)、なほ尽きせずあてになまめかしうおはします(今も尚この上なく上品で優雅でいらっしゃいます)。\*「薄し」は直衣の場合は二藍の色調のことらしく、ざっと青紫の濃淡と見る。

\*宰相殿は(さいしゃうどのは)、すこし色深き御直衣に(大臣よりは少し色の濃い上着に)、\*丁子染めの焦がるるまでしめる(丁子染めの焦げ茶になるまで染め重ねたものと)、白き綾のなつかしきを着たまへる(白い綾織の内着を重ね着していらっしゃって)、ことさらめきて艶に見ゆ(格別に艶めいて見えます)。\*「宰相殿」とは遂に「殿」の呼称だ。作者はこの言葉に晴れがましさを込めたの

だろうか。「御子とも見えず」は源氏殿の若々しさを言うと同時に、君を一人前と認める言い方のようだ。\*「丁子染め」は黄味の強い茶色、らしい。「焦がるるまでしめる」には何度も染め重ねるのだろう。

#### [第八段 夕霧と雲居雁の固い夫婦仲]

\*灌仏率てたてまつりて(この日の四月八日は釈迦の誕生際で、六条院でも甘茶注ぎの釈迦像を連れ持って祭るべく)、御導師遅く参りければ(お経を上げる導師僧が遅く参上したので)、日暮れて(日が暮れてから)、御方々より童女出だし(各御部屋様方から童女を遣いにして)、布施など(布施供物など)、公ざまに変はらず(御所での作法に習って)、心々にしたまへり(様々に祭壇に飾り付けなさいました)。御前の作法を移して(御所での儀式を引き継いで)、君達なども参り集ひて(高官たちも参列に集まって)、なかなか(却って)、うるはしき御前よりも(天井の高い御所正殿での整然とした法会式よりも)、あやしう心づかひせられて臆しがちなり(六条院の私邸仕様の間取りや天井高の日常性に法要の非日常性が独特の印象深さで、抹香が濃く漂って仏法然とした厳かさに身が引き締まるようでした)。\*「灌仏(くわんぶつ)」はく仏像に香水(こうずい)を注ぎかけること。また、その仏像。浴仏。>と大辞泉にある。また、「灌仏会」の略ともあり、「灌仏会(くわんぶつゑ)」はく陰暦4月8日の釈迦(しゃか)の誕生日に、花御堂(はなみどう)に安置した釈迦像に甘茶を注ぎかける行事。正しくは5種の香水(こうずい)を注ぐ。仏生会(ぶっしょうゑ)。誕生会。降誕会(ごうたんゑ)。浴仏会。花祭り。《季春》>とある。ということは、此処の文は花まつりの話で、それを六条院で行なう為に法会を依頼した菩提寺から導師僧が釈迦像を持ち込んで祭り上げたようで、「灌仏」はその調達した仏像のことらしい。注にはく四月八日の釈迦誕生の日の灌仏会。寺から誕生仏を借り受けて行く。>とある。私のような者は、祭日が四月八日と決まっているのなら、本来はその日に寺に参詣するもの、のように思うので、六条院のそれは真似事なのだろうと思うが、「御前の作法を移して」とあるから、宮廷儀式としては寺ではなく御所で行なわれたものらしく、直ぐには事情が呑み込めない文だった。が、ともかく、六条院ではそれを模して行なったようで、且つ御所よりも格式張らないだけに、本来の誕生祝いという仏法の有難味への情味と六条院の物性の見事さがその御利益を体現しているような厳かさ、があったのかも知れない。が、どんな仏像だったのか、法会としての正当性はどうだったのか、などの実情は分からない。ただ、この日の六条院のお祭騒ぎの賑やかさは表現されているのだろう。

宰相は(二日目の再訪問という許婚の礼を果たすべく宰相君は)、\*静心なく(こうした誕生祭の中でも、そわそわと)、いよいよ化粧じ(ますます念入りに髪形を整えて)、ひきつくろひて出でたまふを(立派に着付けして内大臣邸にお出掛けなさるのを)、わざとならねど(結婚相手としてではないが)、情けだちたまふ若人は(若君と肉体関係のあった若女房は)、恨めしと思ふもありけり(お引き立てに与れなかった事を恨みに思うものもいました)。年ごろの積もり取り添へて(しかし長年の積もる思いを此処に重ねての)、思ふやうなる御仲らひなめれば(念願適った御夫婦の訳なので)、\*水も漏らむやは(誰が割り込む隙などは、ありません)。\*「しづごころなく」は注にく四月八日夜、結婚第二夜。是非とも雲居雁のもとに行かねばならない。>とある。\*「水も漏らむやは」は注にく「などてかくあふごかたみになりにけむ水漏らさじと結びしものを」(伊勢物語、六一)による表現。「やは」係助詞、反語。語り手の口吻。>とある。反語表現だから省略された語尾は「(やは)ある」で、其処まで言い換えればくありません>だ。引歌は伊勢物語二十八段に、「むかし 色好みなりける女 出でて去にければ」を詞書にした歌選のように記されたものようで、「あふごかたみ」を「合ふ互片身」と「会ふ期難み」の掛詞とする詠み方で、「水漏らさじと結びしものを」をく担ぎ手が一人抜けて天秤棒の片方が傾き、漏れないように結び下げている水がこぼれた>とく他の誰とも情を交わさないと堅く約束したのに、会えなくなってしまった>とに洒落たものらしい。

主人の大臣(あるじのおとど、家主の内大臣は)、いとどしき近まさを(親しんでみると思った以上に優れていた宰相君を)、うつくしきものに思して(とても立派だとお思いになって)、いみじうもてかしづききこえたまふ(実に丁重に持て成し申しなさいます)。負けぬ方の口惜しさは(我慢比べに負けたことの悔しさは)、なほ思せど(源氏殿には、やはりお持ちだったが)、罪も残るまじうぞ(宰相君には、罪が無かったかのように)、まめやかなる御心ざまなどの(姫への誠実な御婚意を)、年ごろ異心なくて過ぐしたまへるなどを(長年心変わり無く過ごしていらっしやったことなどを)、ありがたく思し許す(貴重に思って穏やかに応対なさいます)。

女御の御ありさまなどよりも(立后を逸し懐妊もない弘徽殿女御の御境遇よりも)、はなやかにめでたくあらまほしければ(臣下身分とはいえ優秀な源氏君と結ばれ、晴れて目出度く相思相愛の理想的な状態にある外腹姫を)、北の方(女御の実母である正妻や)、さぶらふ人びとなどは(その女房たちは)、心よからず思ひ言ふもあれど(素直に祝うべきではないように思い言うこともあったが)、何の苦しきことかはあらむ(実の所今となつては是以上の慶事は内大臣家に望むべくも無く、何の問題にも成りません)。按察使の北の方なども(姫の実母の按察使大納言の奥方なども)、かかる方にて(この結末を)、うれしと思ひきこえたまひけり(嬉しく思っていると便りを寄越し申しなさいました)。